倉本聰

SCENARIO 1989

北の国から

'89 帰郷

RIRON-SHA

北の国から

'89 帰郷

倉本聰

SCENARIO 1989

理論社

北の国から'89帰郷

著者　倉本聰

制作　小宮山量平

発行　山村光司

株式会社　理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話　営業〇三(二一〇三)五七九一
出版〇三(二一〇三)五七九四
編集〇三(二一〇三)二五七七

振替　東京九―九五七三六

発行日　一九八九年三月　第一刷

©Sō Kuramoto 1989 Printed in Japan
NDC 912 四六判 20cm 200p ISBN4-652-07142-6
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

倉本聰作品

装幀・装画　小野州一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

北の国から ’89帰郷

本書は一九八九年三月三一日フジテレビ系全国ネットで放送されるドラマのシナリオです。

1

黒板五郎の顔

かなり酩酊してヘラヘラ笑っている。

相手の姿は見えないが、富良野の行きつけの『駒草』のカウンターらしい。

五郎「ア、どうもスイマセン、ご馳走に――ア、コボレマス！――どうも」

飲む。

間。

五郎「観光客の方ですか？　スキー？　スキーにも見えないよね。観光――。めずらしいねこの季節に。ただの観光。イヤ私買います。このシーズンに観光に来られる方。いちばん良いもン、なンもないけど」

間。

五郎「本当いいますとね。へへ――ちょっと恨ンでるンす。最近観光地になりましてネ富良野。どういうわけかアタシ知らないけど。人が来てくれるのは嬉しいサそりゃ。前は一日で人の顔見るより、狐の顔見るほうが多かったンだから」

間。

五郎「でもいろんな人来るからね。畑に入るわ、空きカンは捨てるわ、それで来てやったンだからって威張ってる。そういう人も中にはいてさ」

間。

五郎「伊藤さんちの人参畑なンて道路っぷちにあるもンだから、この夏一月で拾った空きカン、全部集めたら三百六十五本！」

間。

五郎「あれ計算して捨てたのかね」

間。

五郎「奥さん東京？」

間。

五郎「お嬢さんじゃないよね。アレ？——お嬢さん？」

並んで飲んでいる中畑和夫が瞬間見える。和夫は五郎をつついたらしい。

五郎「お嬢さんじゃないよォ、失礼だよォ。酸いも甘いも噛みわけた顔だもン。痛テッ」

和夫「すみません。こいつ酔ってるもンスから」

五郎「酔ってますちょっと、ハイ。（ヘラヘラ、ペコンとお辞儀して）ゴメンナサイ!?」

間。

五郎「めでたいことちょっとありましてね」

間。

五郎「伜の送って来た金で飲んでるンス」

間。

五郎「伜、東京にいましてね、昼間働いて夜学に通って、キチンと毎月金入れてくれます。感謝！」

間。

五郎「大学に行かそうと思ってます、ハイ。中学の先生も純の頭なら絶対大学やるべ

きだって。ア！——奥さんもしかしたら大学出だ！——大学出てる！　ネ？　当りィ！」

間。

五郎「娘はね、去年の春中学出てから看護学校に通いだしました。旭川にある定時制の」

間。

五郎「めでたいことって——、実いいますとね」

間。

五郎「螢、今日旭川に引越してったンです。螢っていうンです娘の名前」

間。

五郎「去年はこっちからずっと一年間、旭川まで通ってました。よく続きましたよ毎日毎晩。だってあなた旭川に通うっていうとネ——。定時制の看護学校に通うには午前中病院で働くンです。そのためには毎朝六時二分、富良野発の始発に乗んなきゃなんない。麓郷出るのは五時二十五分、起きるのはしたがって四時五十分。私毎朝駅まで送った。だってバスまだ走ってないンだもン」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

音楽――テーマ曲、イン。

麓郷街道（朝まだき）

五郎の車のヘッドライトが来る。

五郎「車なンて一台も通ってなかった。去年の秋はまた――紅葉がきれいでさァ――！」

音楽――盛りあがって。

タイトル流れて。

そのタイトルバックで、

駅へ向かう車と、明けてくる富良野。

駅へ着く車。

螢「（とび下り）アリガト」

改札へ走る。

すぐ発車する五郎の車。

ホーム

発車のベル。

階段をかけ下り、列車にとび乗る螢。

タイトル終り、テーマ曲消えていって。

走る車内

先頭車輛へ移動する螢。

その目にポツンと坐っている一人の青年。

本から一瞬だけ目をあげる。

螢、まったく目を合わさず、一つ離れて通路をはさんだいつもの定位置に席をとる。

ガラ空きの車内。

螢、教科書を出し、読みはじめる。

窓外

景色が飛んでゆく。

走る車内

螢。

青年。

たがいにまったく口をきかないが、明らかに相手を意識している。

駅

学生が二人乗ってくる。

走る車内

螢と青年。

車窓

十勝の山波が走る。

走る車内

螢、目が疲れ、ちょっと顔をあげる。

青年、眠っている。

その膝から本が落ちそうだ。

螢。

——どうしようかと迷う。

読んでいる本の名前が見える。

『風の又三郎——宮澤賢治』

螢。

青年の膝から本が落ちる。

立とうとする螢。

青年、ハッと目をさます。あわてて本を拾い、ついでにチラと螢を見る。
窓外の景色を見ている螢。

窓外

街並が流れ出している。

旭川駅

改札を出た青年、構内にある立喰いそばやへ。注文しつつ背後を意識する。
その後を街へ歩み出る螢。

同・駅表

螢、出てきて、歩きだす。

竹内外科・肛門科医院

入ってゆく螢。

同・医局

螢、ジャンパーを脱ぎ制服に着がえる。

その胸についている「見習」のバッジ。

賄いのおばさん沢田が入って、

沢田「おはよ」

螢「おはようございます」

沢田「三号室の田村さん今日からおかゆでよかったンだよネ」

螢「(ノート見て) そうです」

准看の明子入る。沢田外へ。

明子「おはよう」

螢「おはようございます」

明子「注射器の洗滌やっとくから外来のカルテ出しといて」

螢「ハイ」

明子「今日患者さん多そうだから」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbo